

小高町文化財調査報告第4集

東 広畑 B 遺跡

2002年3月

福島県相馬郡小高町教育委員会

小高町文化財調査報告第4集

東 広畑 B 遺跡

2002年3月

福島県相馬郡小高町教育委員会



第1地点調査区全景



S K 0 2 遺物出土状況

目 次

原色図版

目 次

例 言




凡 例

第1章 概 要	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 東広畑B遺跡と周辺の遺跡	1
第3節 調査の概要	4
第2章 遺構と遺物	6
第1節 第1地点	6
第2節 第2地点	10
第3節 その他の出土遺物	14
第3章 ま と め	17
出土遺物観察表	21
写真図版	

例 言

1. 本書は福島県相馬郡小高町大字小高字東広畑に所在する東広畑B遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は町道工事に伴う事前調査として小高町教育委員会が実施した。
3. 試掘調査は平成6年1月から2月まで、本発掘調査は平成7年4月から平成7年7月まで、整理調査および報告書作成は平成7年4月から12月、及び平成13年4月から平成14年3月まで実施した。
4. 試掘調査、本調査及び平成7年の整理調査は玉川一郎が担当した。平成13年から平成14年の整理調査は川田強が担当した。
5. 本書の執筆と編集は川田強が担当した。現地測量及び図版作成は各調査参加者が行い、遺物の写真撮影は川田強が行った。
6. 発掘調査等の調査参加者は以下のとおりである。
平成7年度発掘調査 星義弘 志賀和浩
一般作業 小高町シルバー人材センター委託
平成13年度整理調査 松本経子 渡部定子
7. 調査および報告書作成にあたり玉川一郎氏、吉田陽一氏、佐川久氏にご協力・ご指導を賜った。

凡 例

- 1 本書で掲載した挿図の縮尺は各挿図に記してある。
- 2 遺構等の平面図のトーンによる表現は各図にその内容を記してある。
- 3 図示した遺物については観察表にその内容を記してある。出土土器観察表の法量は上段：口径、中段：器高、下段：底径であり、() 表示は復元値である。
- 4 遺物実測図の表現は次のとおりである。
赤 彩：塗彩部分 
黒色処理：部 分 
須 恵 器：断 面 
- 5 写真図版の遺物の縮尺は不同である。
- 6 遺物写真の番号は挿図番号に対応している。

第1章 概 要

第1節 調査にいたる経緯

東広畑B遺跡は平成6年1月に表面調査が実施され、発見された遺跡である。同年1月及び2月に町営宅地造成事業に伴う試掘調査が実施された。この調査により、土師器等が多数出土し、平安時代の住居跡が検出されたことから、事前の発掘調査が必要なが確認された。

協議の結果、町営宅地造成事業に先立って行われる町道工事について、開発計画の変更が困難であるとのことから、平成7年4月29日～7月9日まで小高町教育委員会が本発掘調査を実施した。

第2節 東広畑B遺跡と周辺の遺跡

東広畑B遺跡が所在する相馬郡小高町は福島県浜通り地方のほぼ中央、相馬郡の南端に位置する。小高町の地形は浜通り地方の一般的な地形と同様に双葉断層を境にして西に阿武隈山地、東に相双丘陵及び段丘が樹枝状に分布するものである。このうちの東部分の地形は小高川・宮田川等小河川により形成された沖積地、これらに開折された海成・河成段丘、それを取り巻く丘陵地と大きく区分できる。これらは概ね町の北半部が小高川流域、南半部が宮田川流域にあたり、宮田川河口には井田川浦という比較的大きな潟湖の干拓地があり、小高川河口には前川浦という潟湖が現在も残っている。

丘陵地縁辺に位置する海成・河成段丘は第四紀の堆積物からなり、5つの段丘面が認められる。このうち、第3段丘は小高川両岸に特に発達しており、平坦面が広いことなどから、旧石器時代以降の遺跡が多く確認されている。



図1 周辺の遺跡 (S=1/40000)

小高川北岸では、この第3段丘が現海岸線より約7kmにわたって沖積地縁辺に存在し、東広畑B遺跡は現海岸線より約4km離れたこの第3段丘面に位置する。遺跡周辺の第3段丘は小高川より北上する支谷により開折されており、南方に樹枝状に突き出したような形状を呈している。当遺跡はこの樹枝状段丘の基部に位置し、丘陵を背にして、小高川より北西方向に伸びる支谷に南面した南北約60m幅の緩斜面上にある。標高は約15～22mを測り、沖積地との比高差は約8m、丘陵地とは約15mある。当遺跡と支谷を隔てた南西の段丘上には、東広畑A遺跡があり、縄文時代早期以降の遺物が確認されているが、ほぼ当遺跡と同様の内容をもつものと考えられる。

東広畑B遺跡は弥生時代から平安時代に至る複合遺跡であるが、今回の調査では主に古墳時代～平安時代の遺構・遺物が確認されているので、ここでは当該期の周辺の遺跡を確認しておきたい。

小高川流域は第3段丘を中心に数多くの古墳及び横穴墓が分布している。これらは大きく4つに区分される集中地域を形成している。海岸部の小高川北岸には塚原古墳群(11)や大井花輪古墳群(19)が存在し、塚原古墳群からは石製模造品が確認されていることなどから、5世紀代の古墳が存在するものと推察される。

小高川の支流前川北岸の内陸部、片草南原古墳群(9)及び一里段古墳群(6)が位置する段丘は当地域の中で最も濃密な古墳の分布が認められる地区である。平成12年の一里段古墳群1号墳の調査では6世紀代の所産であることが確認された。

小高川(前川)中流域には十日林古墳(24)や手子塚古墳(22)及びこれらの対岸に中村平古墳群(27)が存在する。また、湖湾である前河浦に注ぐ泉沢川の北岸には下岩崎古墳群(横穴墓群)(32)、上岩崎古墳群(横穴墓群)(33)があり、一つの集中域を形成している。

時期は未確定のものが多いが、塚原古墳群及び前方後円墳とされる手子塚古墳・荒神前古墳(4)等は中期以前に形成された可能性があるものの、これらの多くは古墳時代後期の所産と考えられる。



図2 東広畑B遺跡位置図 (S=1/10000)

表1 東広畑B遺跡周辺の遺跡

No.	遺 跡 名	種 別	時代(古墳～平安)
1	東 広 畑 B 遺 跡	集 落 跡	古 墳 前 ・ 平 安
2	東 広 畑 A 遺 跡	散 布 地	古 墳 前 ～ 平 安
3	上 広 畑 遺 跡	散 布 地	奈 良 ・ 平 安
4	荒 神 前 古 墳	古 墳	古 墳 後 期
5	荒 神 前 遺 跡	集 落 跡 ・ 散 布 地	古 墳 後 期 ～ 平 安
6	一 里 段 古 墳 群	古 墳	古 墳 後 期
7	行 徳 古 墳 群	古 墳	古 墳 後 期
8	片 草 南 原 遺 跡	集 落 跡 ・ 散 布 地	古 墳 後 期 ～ 平 安
9	片 草 南 原 古 墳 群	古 墳	古 墳 後 期
10	北 鳩 原 花 輪 遺 跡	散 布 地	古 墳 前 期
11	塚 原 古 墳 群	古 墳	古 墳 中 期 ～
12	諏 訪 原 遺 跡	散 布 地	古 墳 後 期
13	日 向 横 穴 墓 群	横 穴 墓	古 墳 後 期
14	堂 林 横 穴 墓 群	横 穴 墓	古 墳 後 期
15	横 山 古 墳 群	古 墳 ・ 横 穴 墓	古 墳 後 期
16	清 信 遺 跡	散 布 地	古 墳 後 期 ～ 平 安
17	原 遺 跡	散 布 地	古 墳 後 期 ～ 平 安
18	大 井 花 輪 遺 跡	集 落 跡 ・ 散 布 地	古 墳 後 期 ～ 平 安
19	大 井 花 輪 古 墳 群	古 墳	古 墳 後 期
20	岩 迫 横 穴 墓 群	横 穴 墓	古 墳 後 期
21	元 屋 敷 遺 跡	散 布 地	古 墳 後 期 ～ 平 安
22	手 子 塚 古 墳	古 墳	古 墳 後 期
23	勸 請 内 古 墳	古 墳	古 墳 後 期
24	十 日 林 古 墳	古 墳	古 墳 後 期
25	杉 平 古 墳 群	古 墳	古 墳 後 期
26	中 村 平 遺 跡	集 落 跡 ・ 散 布 地	古 墳 後 期 ～ 平 安
27	中 村 平 古 墳 群	古 墳	古 墳 後 期
28	玉 ノ 木 平 A 遺 跡	散 布 地	古 墳 後 期 ～ 平 安
29	玉 ノ 木 平 B 遺 跡	散 布 地	奈 良 ・ 平 安
30	玉 ノ 木 平 C 遺 跡	散 布 地	奈 良 ・ 平 安
31	漆 原 横 穴 墓 群	横 穴 墓	古 墳 後 期
32	下 岩 崎 古 墳 群 (横 穴 墓 群)	古 墳 ・ 横 穴 墓	古 墳 後 期
33	上 岩 崎 古 墳 群 (横 穴 墓 群)	古 墳 ・ 横 穴 墓	古 墳 後 期

これらの古墳群の周囲には当該期の多くの散布地があり、これらが立地する段丘面に古墳と共に集落が存在するものと予測される。当地域は古墳時代に至り、小高川(前川)北岸域を中心に継続的に集落が形成され、古墳時代後期の群集墳及び横穴墓群の出現をみるものと推定される。

小高川流域の表面調査で最も遺物が出土するのは8世紀中葉以降9世紀代を中心とした時期のものである。この傾向は小高川中下流域だけではなく、上流域および宮田川流域等でも確認できる。これらのうち調査されたものの多くは、鉄滓や羽口及び木炭を焼成したと考えられる土坑等が確認され、鍛冶関連遺跡と意義付けができる。この時期は原町市の金沢製鉄遺跡群等大規模製鉄所の操業が最盛期を迎えているときであり、当地区の遺跡数の増加もこれと関連している可能性がある。

また、「和名抄」に記載される古代行方部の「吉名郷」は、現在も中村平古墳群周辺に「吉名」という地名が残ることから、この地区周辺に比定されている。このことから奈良・平安時代には、この小高川流域が行方部内の一つの核となる地域であったことが伺い知れ、古墳時代以降の濃密な遺跡分布状況もそれを裏付けていると言えるだろう。

第3節 調査の概要

平成6年に先立って行われた町営宅地造成事業に伴う試掘調査で、古墳時代以降の遺物及び平安時代の遺構が確認されている。トレンチは図4に示すとおりである。主に8・10・17・19Tで遺物が多く出土し、7～10・13～19Tを中心に要保存対象地区が設定されている。また、20～23Tは個人住宅建設に伴う試掘調査であり、平成11年に実施したものであるが、遺構は確認されていない。

平成7年の本発掘調査は図3・4に示す第1地点、第2地点の2地点で実施されている。調査面積は第1地点が72m²、第2地点が100m²である。第1地点の調査は平成7年4月29日～5月27日まで、第2地点の調査は平成7年6月1日～7月9日まで実施された。

第1地点は平安時代の住居跡2軒、土坑2基、時期不明の溝が1条確認されている。第2地点は古墳時代前期の住居跡1軒の他、時期不明の溝1条、土坑5基、性格不明遺構1基検出された。

調査はいずれの地点も表土を重機で掘削し、実施された。表上下数十cmで確認面であるシルト質のローム面が認められる。第1地点は現道により既に南側が掘削された状況で調査がなされている。

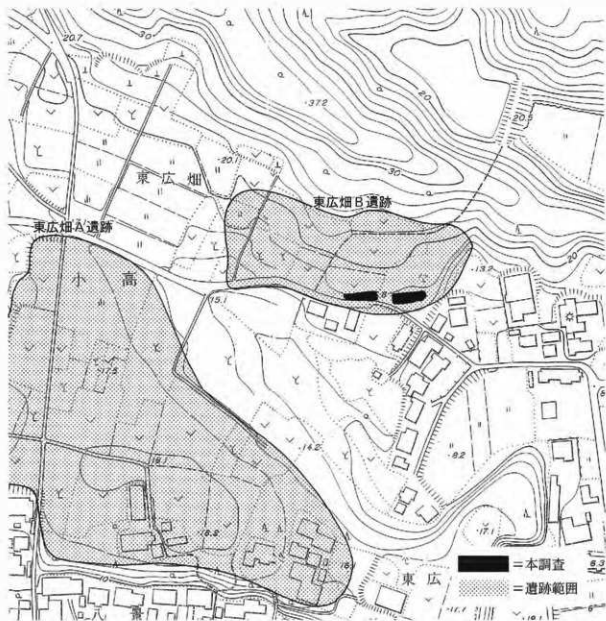


図3 東広畑B遺跡位置図 (S=1/3000)

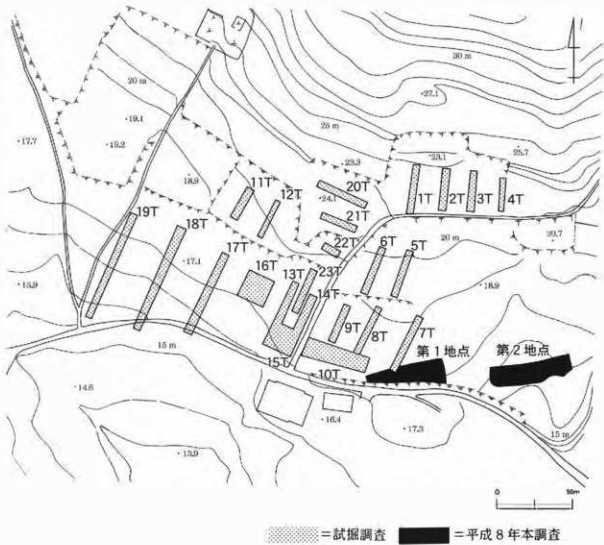


図4 東広畑B遺跡調査状況図 (S = 1 / 1000)

第2章 遺構と遺物

第1節 第1地点

1 SI01(図6)

最大幅 3.7m 形態 方形 確認面よりの深さ 約40cm 主軸 N-32°-E 検出状況
南側半分を現道によって削平されている。SD01によって切られる。覆土 暗灰褐色シルトを基調とする。小穴 (P1-20cm P2-15cm P3-20cm) 柱穴は明確ではなかった。カマド 北壁で確認された。ローム質の暗黄褐色シルトで袖部を構築する。火床面から煙道部にかけて被

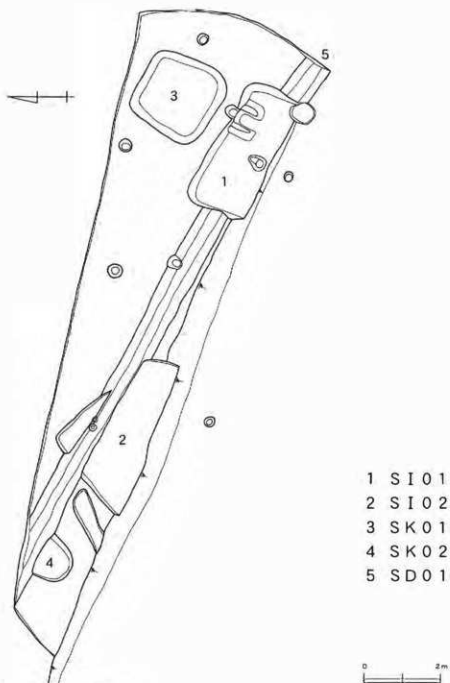


図5 第1地点全体図 (S=1/100)

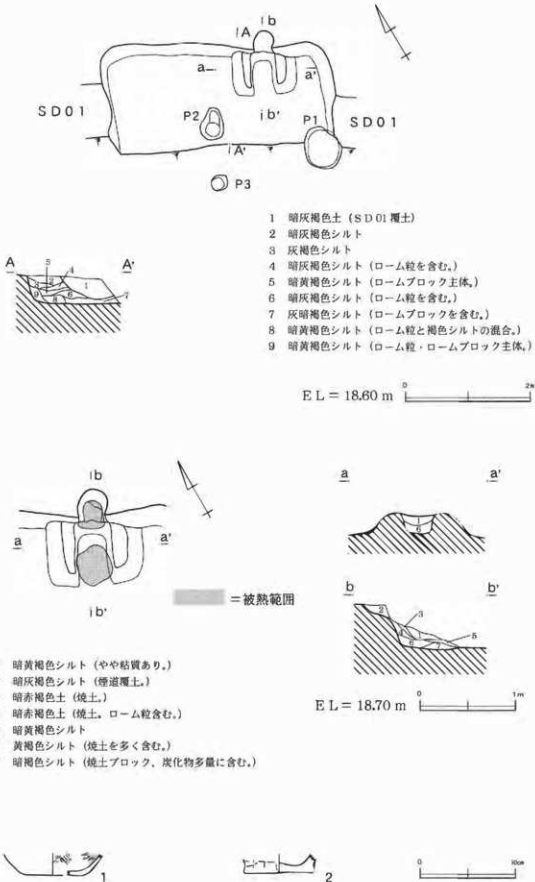


図6 SI01平面図・出土遺物 (S=1/60・1/40・1/4)

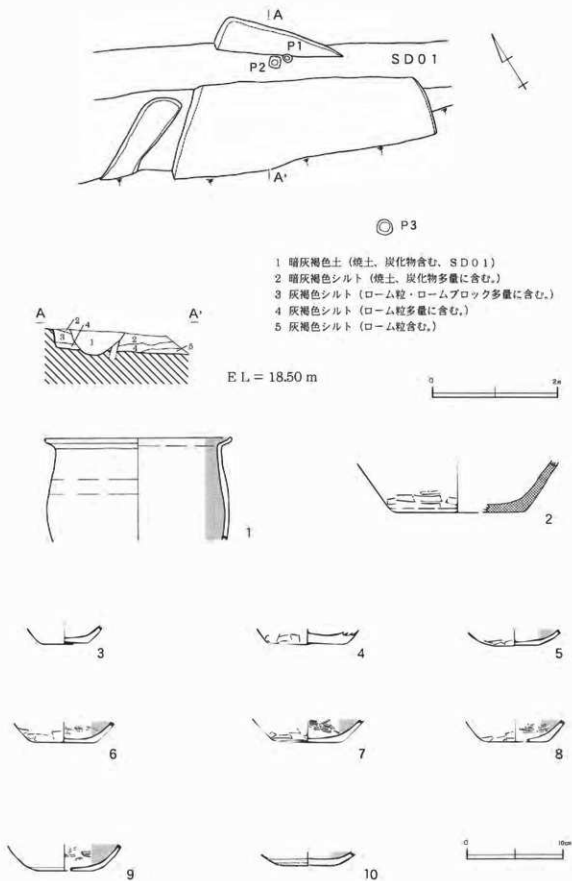


図7 S102平面図・出土遺物（S=1/60・1/4）

熱部が認められる。遺物 実測可能なものは少なかった。1はロクロ整形底部回転ヘラ削りの杯、2が裏の底部である。その他、実測できなかったが煙道部よりロクロ整形の内黒杯の破片が出土している。また覆土中より、鉄滓が少量出土している。時期 出土土器より9世紀代の所産であることは確実であり、9世紀前半段階に位置付けられる可能性が高い。

2 S102(図7)

最大幅 推定3.8m 形態 不整形方形 確認面よりの深さ 約30cm 主軸 N-44°-E 検出状況 南側半分を現道によって削平されている。SD01に切られる。覆土 暗灰褐色シルトを基調とし、炭化物、焼土が全体的に認められる。小穴 柱穴は認められなかった。カマド 確認できなかったが、覆土の特徴から、SD01に壊された可能性がある。遺物 1はロクロ整形の裏で内面は黒色処理され、口縁端が垂直に立ち上がる形態のものである。本遺構出土破片とSK02出土破片とが遺構間接合したものである。2は須恵器の裏である。3は小型裏の底部、4は内黒の裏の底部である。5~10はすべて内黒杯の底部で、体部下位~底部にかけてヘラ削りが施される。底部径は5.0~7.2を測る。時期 出土土器より9世紀代の所産と考えられ、遺構間接合したSK02出土土器とあわせ、その前半段階に位置付けられる。

3 SK01(図8)

規模 2.2×2.2m 形態 方形 確認面よりの深さ 約20cm 主軸 N-35°-E 検出状況 S101のカマド主軸の延長線上に位置することから、S101と関連する遺構の可能性が有る。また、両脇に位置する小穴は深さ約30cmあり、等間隔に配置されていることから、この土坑と一連の遺構であると考えられる。覆土 暗灰褐色シルトを基調とする。遺物 1は非内黒で、焼成の悪い杯である。やや内湾気味に立ち上がる形態をしており、椀形に近い。体部下位~底部外周に回転ヘラ削り、底部中央は糸切り痕が認められる。2は体部下位~底部にかけて回転ヘラ削りが施される内黒杯である。時期 出土土器から9世紀代の所産と考えられる。

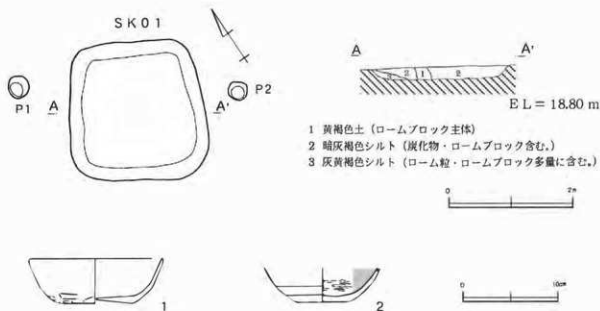


図8 SK01平面図・出土遺物 (S=1/60・1/4)

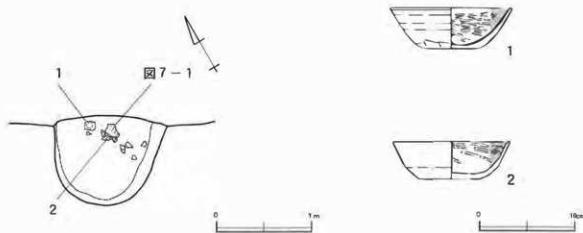


図9 SK02平面図・出土遺物 (S=1/40・1/4)

4 SK02(図9)

最大径 1.1m 形態 不整形 確認面よりの深さ 約10cm 検出状況 SD01に切られる。遺物 一括して半完形の土師器が出土した。図7-1の裏は本遺構出土破片とS102出土破片が遺構間接合したものである。1・2は内黒で、体部下位～底部に回転ヘラ削りが施されるロクロ整形の杯である。口縁がわずかに外反する特徴があり、底径は6.1~6.2、底径口径比は0.5以下を測る。時期 遺構間接合したS101出土土器とあわせ、9世紀前半の所産と考えられる。

5 SD01(図5)

最大幅 約0.8m 最大長 15m以上 断面 形態 U字形 確認面よりの深さ 約40cm 検出状況 S101・02、SK02を切る。覆土 暗灰褐色シルトを基調とする。遺物 土師器・須恵器が出土したが、実測可能なものは認められなかった。これらは重複する遺構からの流れ込みと考えられる。時期 9世紀代の遺構を切っているが、それ以降の出土土器がなく、不明である。

第2節 第2地点

1 S103(図1)

長軸 3.5m 短軸 3.4m 形態 小判形 確認面よりの深さ 約20cm 主軸 N-3°-E
小穴 明確に主柱穴と言えるものは確認されていない。(P1-10cm P2-18cm P3-16cm P4-15cm P5-24cm P6-19cm P7-19cm P8-14cm P9-19cm P10-15cm P11-21cm P12-12cm) 炉 確認できなかった。遺物 図示した遺物はすべて床面直上の土器である。比較的多数の土器が出土した。1は内外面赤彩される有段口縁の壺である。口唇は内傾するように面取りされ、外面上端はわずかに外反する。有段部下端は粘土紐を貼り付け、下方にやや突出した段部を形成している。口縁外面は横ナデが施され、明確ではないが横方向ミガキが施されている可能性がある。頸部内外面はハケ目後ミガキが認められる。2は壺の底部である。底部外周に粘土紐を貼り付けており、中央がくぼみ形状を呈す。3は外面にミガキが施されることから広口壺とした。体部中位が張り出した形態で、口縁は内外面とも「くの字状」に外反している。口唇は横ナデにより横方向につまみだされ、断面形態は丸素縁化している。外面はヘラ削り後ミガキ、内面はヘラ削り後ナデが施されており、内面には指頭押捺が一部認められる。口縁内面には焼成後の擦痕

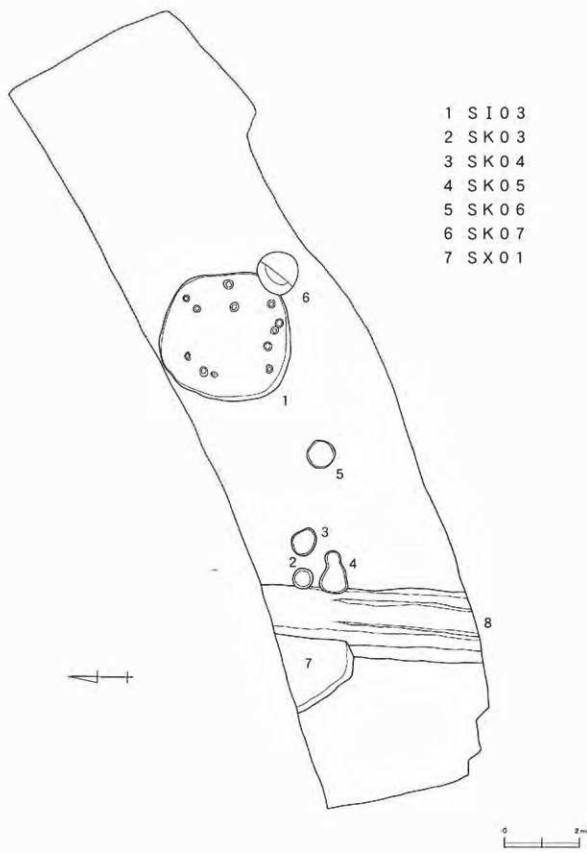


図10 第2地点 全体図 (S = 1 / 100)

があり、転用された可能性がある。4はハケメ調整の裏である。口縁が「くの字」に外反し、胴部の張り出しはやや弱い。体部下位はヘラ削りが認められる。残存している口縁端は輪積部である。5は台付裏の脚部でヘラ削りが施されている。時期 出土土器は塩釜式に相当し、古墳時代前期の所産と考えられる。

2 SK03～SK07(図10)

SK03～SK07からは少量の弥生土器・土師器が出土しているが、図示できるものは無かった。これらの時期及び性格は不明である。SK07はSI01を切っている。

3 SD02(図10)

SD02からは遺物が出土しなかった。SX01を切っている。時期及び性格は不明である。

4 SX01(図10)

SX01からは少量の弥生土器・土師器が出土したが、図示できるものは無かった。SD02に切られる。時期及び性格は不明である。

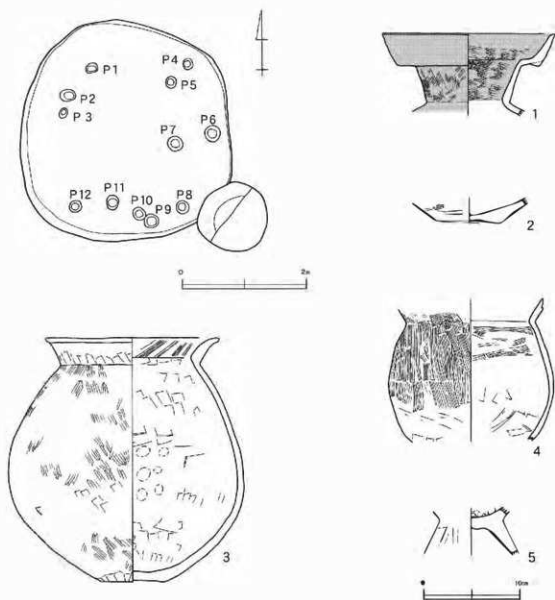


図11 SI03平面図・出土遺物(S=1/60・1/4)

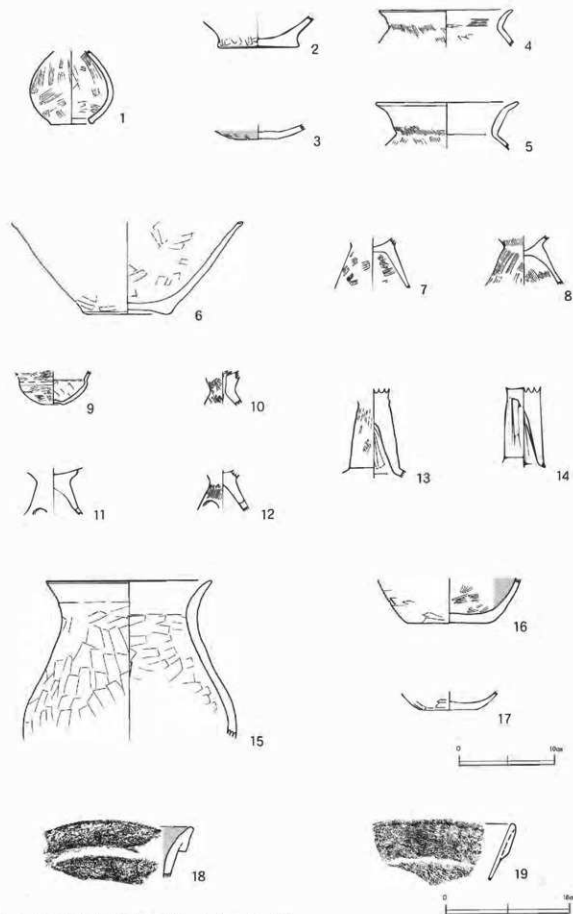


図12 第2地点出土遺物1 (S=1/4・1/3)

5 第2地点出土土器（古墳～平安）（図12）

第2地点で遺構外から出土した古墳時代以降の土器を図12にまとめた。1～14、18、19が埴釜式相当の古墳時代前期のもの、15～17が奈良時代以降のものである。

1は底部穿孔の小形壺である。外面に粗いヘラ削りが認められる。2・3は壺の底部である。4・5は裏で「くの字」に屈曲し、外反する口縁をもち、横ナデが施され、丸素縁化している。体部はハケ目調整である。6は大形壺の体部下半部である。わずかに外面に赤彩の痕跡が認められる。残存部の上端は擬似口縁であり、上方からの刻みが施されている。7・8は台付裏の脚部であり、ハケ目調整が認められる。9は小形の鉢である。外面は丁寧なミガキが施され、体部中に屈曲部をもち口縁は外反するものと考えられる。底部は上げ底の形態を呈す。10は小形器台である。器受部から脚へ穿孔が認められる。11・12は高杯あるいは器台の脚部である。「八の字」状に広がる形態を呈すと考えられる。いずれも、脚部に透孔をもつ。13・14は高杯の脚部である。いずれも柱状中空で裾部が屈曲する形態を呈するものと考えられる。13はミガキ調整が認められるが、14では確認できず簡略化が指摘できる。18・19は複合口縁の壺である。18は明瞭な段をもち、口縁横ナデ、頸部ハケ目、内面赤彩が認められる。19はやや不明瞭な複合部をもち、口縁はハケ目調整の痕跡が認められる。

15はヘラ削り調整の裏である。胴部がやや下膨れ気味の形態を呈す。8世紀代の所産と考えられる。16は内黒杯で体部下半～底部に回転ヘラ削りが施されている。17はいわゆる酸化炎焼成の土質土器である。底部は糸切り未調整であるが、体部下半に粗いヘラ削りが施されている。

この他、遺構外から少量の鉄滓と羽口片が出土している。

第3節 その他の出土遺物

第1・2地点調査で遺構が検出されていない弥生時代以前の遺物と試掘調査時の資料等をこの節でまとめておく。

1 石器（図13）

1～3は第2地点で遺構外から出土したものである。1は緑泥片岩製の打製石鏃とされるものである。側片両側に抉りを形成し、刃部は薄利面が少なく、素材面を利用しているものである。2は打製石斧（石鏃）あるいは扁平片刃石斧と考えられる。粘板岩製である。3は太形蛤刃石斧である。側縁に明瞭な敲打痕が認められることから叩石に転用されたものと考えられる。

第1・2地点で縄文時代の遺物がほとんど検出されておらず、板井式が比較的多く出土していることから、これらは弥生時代中期後半に伴うものと推定される。

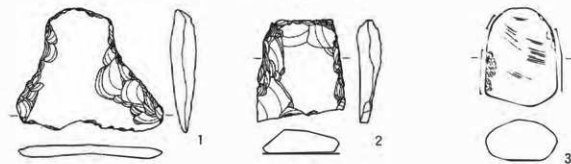


図13 第2地点出土遺物2 (S=1/3)

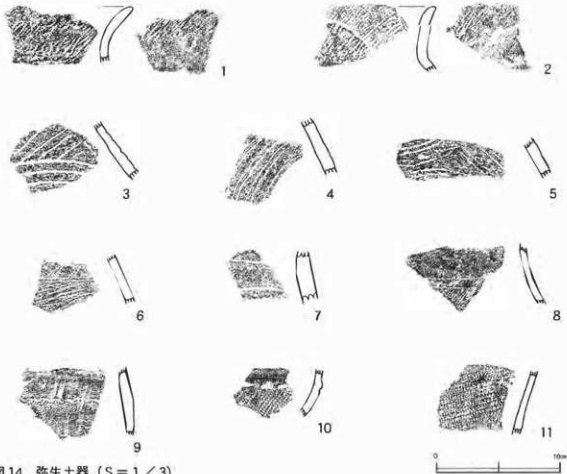


図14 弥生土器 (S=1/3)

2 弥生土器 (図14)

1～11は第1・2地点から出土した弥生土器である。1・2は緩やかに短く外反する形態を呈す壺の口縁で、口縁内外面に縄文が施文される。3～6は平行沈線で重三角文等を描く板井式の壺である。線間は3mm以上を測る。7・8は枳形罎・南御山Ⅱ式に相当する磨消縄文が施されるものである。ヘラ描沈線で区画されている。9は甕の体部で頸部に結節文区画が認められる。頸部の屈曲はやや弱く、緩やかなものと考えられる。10は頸部を列点文で区画する甕である。枳形罎式に相当するものと考えられる。その他少量の縄文を施文する破片があるが図示できなかった。これらの多くは板井式を中心とし、少量の枳形罎・南御山Ⅱ式が含まれるものと考えられる。

3 試掘調査出土遺物 (図15)

第1・2地点の調査に先立って行われた表面調査及び試掘調査出土資料を図15にまとめた。このうち1、2、4、5、9が17Tから、6が19Tから出土したものである。1・2は内黒杯で、体部下位～底部をヘラ削り調整している。2は一部糸切り痕を残す。3も内黒杯であるが、口縁がわずかに外反し、底部は糸切り未調整である。これらはいずれも底径口径比0.5以下である。4は底部外周ヘラ削りの内黒杯である。やや椀杯に近く直立したような立ち上がりを示す形態である。これらは概ね9世紀代に位置付けられる。6は「ハの字」状に開く脚部を持つ高台杯で内面黒色処理が認められる。10世紀前半頃の所産と考えられる。7は須恵器の大甕である。8は土師器甕でヘラ削り調整である。他に多数の土師器片等が出土したが、図示することができなかったが、ここに図示する遺物と同じく8世紀中葉から10世紀までのものが主体であり、中でも9世紀代の遺物が多い。

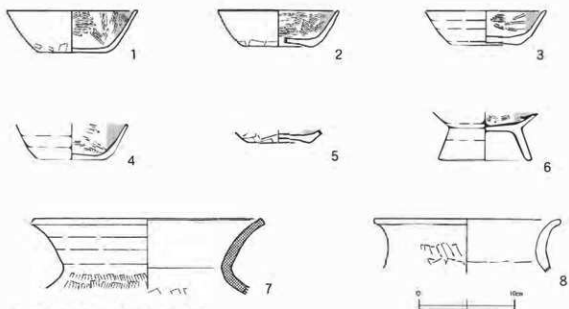


図15 試掘調査・表面調査出土遺物

4 寄贈資料 (図16)

図16は昭和58年に小高字東広畑で表採され、小高町教育委員会に寄贈された資料である。本資料が採集された詳細な場所は不明であるが、当遺跡及び東広畑A遺跡に伴うものと考えられる。

1は口縁が「くの字」に屈曲する甕で、外面はヘラ削りの他、一部ミガキが認められる。球胴及び長胴化が認められない形態であることから、古墳時代中期の所産と考えられる。今回の調査ではこの時期の資料は得られていないが、当遺跡及び東広畑A遺跡に5世紀代の遺構が存在することを予測させる資料である。

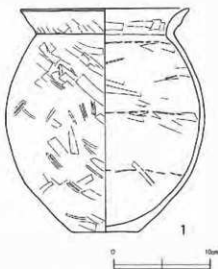


図16 寄贈資料 (S=1/4)

第3章 まとめ

ここで、今回の東広畑B遺跡調査の概略を時代別に記し、本報告のまとめとしたい。

今回の調査区からは、縄文時代の遺物・遺構は確認されなかった。隣接して縄文時代前期の片草貝塚が存在するが、当表採資料の中にも縄文時代の資料はほとんどなく、縄文時代の遺構は当遺跡の範囲では主体的に分布していないものと考えられる。

弥生時代としては、少量の土器が出土したが、遺構は確認されなかった。出土土器は、桜井式を中心としているが、一段階古い枳形罎式・南御山Ⅱ式も弱冠含まれている。現在のところ、弥生時代中期後半の遺構は、当遺跡だけでなく小高川流域では確認されていないが、当該期の土器が近隣の荒神前遺跡や中村平遺跡でも出土しており、前後の段階に比べ、小高川中流域の広い範囲で生活の痕跡が認められることから、今後の調査の進展によって遺構が確認されることが予測される。

古墳時代に該当するものとして、塩釜式の土器を伴う住居跡が1軒検出された。当該期の遺構は小高町内では初めての検出である。伴う遺物は多くはないが、有段部が外反せず直線的な形態の特徴的な壺(図11-1-1)が出土している。他にハケメ調整の甕、台付甕、広口壺などがある。また、遺構外出土の資料には柱状中空で裾部に屈曲をもつ高杯(図12-13、14)などがみられる。これらの出土土器は新地町山中遺跡出土土器(福島県教育委員会ほか1990)や浪江町本屋敷古墳群1号墳・2号墳出土土器(法政大学考古学研究室1985)と共通する部分があり、細分は難しいが、仙台平野を中心とした辻秀人氏の編年(辻1995)によれば、Ⅲ期に相当する資料と言え、前期後半の資料と位置付けられる。当地方では資料数の少ない時期であり、貴重な資料といえるだろう。

また、当遺跡周辺の表採資料として5世紀代の遺物も確認されている。第1章で記したように小高川北岸の段丘面は古墳や横穴墓が多く分布し、古墳時代の遺跡の集中域である。当遺跡はこの一角を担う古墳時代前期以降の集落であることができよう。そして、今回、前期段階の遺構が確認されたことは、当地方の古墳時代を考える上で重要な成果といえるだろう。

奈良・平安時代の土器は主に8世紀中葉～10世紀前半までの資料が確認されている。遺構としては住居跡が2軒、土坑が2基検出されている。これらは概ね9世紀の前半段階に位置付けられ、試掘調査等においても、この時期の遺物が最も顕著であり、当遺跡の中心となる時期と考えられる。また、わずかではあるが、鉄滓や羽口が出土していることから、鍛冶関連遺跡としての性格を当遺跡に付け加えることもできるだろう。

今回の調査はわずかな面積であるが、東広畑B遺跡唯一の発掘調査であり、その概要を把握することができた。当遺跡が位置する小高川北岸域は多数の遺跡が確認されているが、大規模な発掘調査はこれまで実施されておらず、未調査のものがほとんどであり、不明点が多い。そのような状況の中で今回の調査成果は貴重なものといえ、これらの遺跡の内容を推察する一助になるものと言えよう。

参考文献

- 小高町 1975 「小高町史」
- 小高町教育委員会 2001 「小高町内埋蔵文化財調査報告Ⅰ」
- 小高町教育委員会 2001 「角部内南台遺跡」
- 佐久間正明 2000 「福島県における5世紀代の土器変遷—様式的側面を中心に—」『法政考古学第26集』
- 竹島国基編 1983 「天神沢」竹島コレクション考古図録第1集
- 竹島国基編 1992 「板井」竹島コレクション考古図録第3集
- 玉川一郎 1998 「第1章 近世以前の大字小高」『大字小高史』福島県相馬郡小高町大字小高史編集委員会
- 辻秀人 1995 「東北部における古墳出現期の土器編年—その2—」『東北学院大学論集 歴史学・地理学第27号』
- 福島県教育委員会 1991・1994・1995・1996・1998・1999 「請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ」
- 福島県教育委員会 勸福島県文化センター 地域振興整備財団 1990 「第1編 山中遺跡」『相馬地域開発関連遺跡調査報告Ⅱ』
- 福島県教育委員会 勸福島県文化センター ㈱東北電力 1995 「原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅴ・Ⅵ」
- 福島県教育委員会 勸福島県文化センター 1986・1988 「国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅱ・Ⅳ」
- 法政大学考古学研究室 1985 「本屋敷古墳群の研究」
- 安田稔 1990 「考察編 第2章 古墳時代」『相馬地域開発関連遺跡調査報告Ⅱ』

出土遺物観察表

表2 出土土器観察表(土師器・須恵器)

挿図番号	器種	法量(cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
6-1	土師器 杯	— (6.4)	外面体部回転ナズ、底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	密 小石・白色針状物質	外にぶい黄白色 内 黒色	SI01
6-2	土師器 甕	— (7.2)	外面ヘラ削り。内面ヘラ削り後ナズ。	やや粗 砂粒・小石	にぶい橙褐色	SI01
7-1	土師器 甕	(20.0) —	内外面回転ナズ。内面黒色処理。	密 小石・白色針状物質	外にぶい褐色 内 黒色	SI02 SK02
7-2	須恵器 甕	— (14.0)	体部回転ナズ。体部下端・底部ヘラ削り。内面ナズ。	緻密 小石	灰白色	SI02
7-3	土師器 甕	— 5.2	外面体部回転ナズ、底面ヘラ削り。内面ナズ。	やや粗 砂粒・小石・白色針状物質	赤褐色	SI02
7-4	土師器 甕	— (8.4)	外面ヘラ削り。内面ナズ、黒色処理。底部ヘラ削り。	密 砂粒・白色針状物質	外にぶい褐色 内 黒色	SI02
7-5	土師器 杯	— (5.0)	外面体部上位回転ナズ、下位ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 小石・白色針状物質	外にぶい褐色 内 黒色	SI02
7-6	土師器 杯	— (7.0)	外面体部上位回転ナズ、下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状物質	外にぶい褐色 内 黒色	SI02
7-7	土師器 杯	— (7.2)	外面体部上位ナズ、下位ヘラ削り。底部ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	密 小石・白色針状物質	外にぶい灰褐色 内 黒色	SI02
7-8	土師器 杯	— 6.4	外面体部上位回転ナズ、下位ヘラ削り。底部ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 小石・白色針状物質	外にぶい褐色 内 黒色	SI02
7-9	土師器 杯	— (5.9)	外面体部上位回転ナズ、下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	SI02
7-10	土師器 杯	— (5.8)	外面体部上位回転ナズ、下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外にぶい赤褐色 内 黒色	SI02
8-1	土師器 杯	(14.6) 4.7 (7.8)	外面体部上位回転ナズ、体部下位回転ヘラ削り。底部糸切り後外周回転ヘラ削り。内面回転ナズ。	やや粗 小石・白色針状物質	外 褐色 内にぶい灰褐色	SK01
8-2	土師器 杯	— 5.6	外面上位回転ナズ、下位・底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	SK01
9-1	土師器 杯	(12.8) 4.3 6.1	外面上位回転ナズ、下位・底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外にぶい褐色 内 黒色	SK02
9-2	土師器 杯	(12.4) 4.0 6.2	外面上位回転ナズ、下位・底部回転ヘラ削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状物質	外にぶい褐色 内 黒色	SK02
11-1	土師器 壺	18.4 — —	口縁外面横ナズ、赤彩。外面頸部～体部、内面口縁部～頸部ハケ目後ミガキ、赤彩。内面体部ナズ。	緻密 砂粒・白色針状物質	外 赤褐色 内 胴部にぶい褐色	SI03

挿図 番号	器種	法量 (cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
11-2	土師器 壺	— 6.9	外面ヘラ削り後ミガキ。内面ナデ。	密 砂粒・小石	にぶい黄褐色	ST03
11-3	土師器 広口壺	(18.4) 25.7 6.6	内外面口縁ヘラ削り後横ナデ。外面頸部へ 体部ヘラ削り後ミガキ、底部ナデ。内面頸 部へ底部ヘラ削り、摺ナデ。	密 砂粒・白色針状 物質	黒灰色	ST03
11-4	土師器 甕	— — —	外面ハケ目。内面体部上位ハケ目後ナデ、 体部下位ヘラ削り後ナデ。	密 砂粒・白色針状 物質	暗褐色	ST03
11-5	土師器 台付甕	— — —	内外面ヘラ削り後ナデ。	緻密 砂粒・小石・白 色針状物質	橙褐色	ST03
12-1	土師器 壺	— (4.2)	底部穿孔。外面ヘラ削り。内面ヘラ削り後 ナデ。	密 砂粒・小石	にぶい暗褐色	第2地点
12-2	土師器 壺?	— — 8.8	外面ハケ目後ナデ。底部ヘラ削り後ナデ。 内面ナデ。	密 砂粒・褐色粒・ 白色針状物質	にぶい褐色	第2地点
12-3	土師器 壺?	— — 4.6	外面ミガキ、赤彩。底部ナデ、赤彩。内面 ナデ。	密 砂粒・白色針状 物質	にぶい褐色	第2地点
12-4	土師器 甕	14.4 — —	外面口縁横ナデ、外面頸部へ体部刷毛目。 内面口頸部ハケ目後横ナデ、体部ヘラ削り 後ナデ。	緻密 砂粒・白色針状 物質	にぶい褐色	第2地点
12-5	土師器 甕	(15.2) — —	外面口縁横ナデ、外面頸部へ体部刷毛目。 内面口頸部ハケ目後横ナデ、体部ヘラ削り 後ナデ。	緻密 砂粒・白色針状 物質	にぶい褐色	第2地点
12-6	土師器 甕	— — 9.0	外面体部上位ナデ、赤彩?外面体部下位ヘ ラ削り。内面ヘラ削り後ナデ。上端輪積み 痕、刻目あり。	密 砂粒	にぶい褐色	第2地点
12-7	土師器 台付甕	— — —	外面ハケ目。内面脚部ナデ、脚部ハケ目後 ナデ。	緻密 砂粒・白色針状 物質	にぶい赤褐色	第2地点
12-8	土師器 台付甕	— — —	外面ハケ目。内面脚部ナデ、脚部ハケ目後 ナデ。	やや粗 砂粒・小石・白 色針状物質	にぶい黄褐色	第2地点
12-9	土師器 鉢	— — (2.8)	外面ミガキ。底部中央ナデ。内面ヘラ削り 後ナデ。	緻密 砂粒・白色針状 物質	にぶい褐色	第2地点
12-10	土師器 器台	— — —	外面ハケ目後ミガキ。内面器受部ミガキ、 脚部ナデ。器受部底面穿孔。	緻密 砂粒・白色針状 物質	外 黄褐色 内器受部 赤褐色	第2地点
12-11	土師器 高杯?	— — —	内外面調整不円。脚部穿孔。	粗 小石	にぶい褐色	第2地点
12-12	土師器 高杯?	— — —	外面ミガキ。内面脚部ナデ。脚部穿孔。	密 小石	赤褐色	第2地点
12-13	土師器 高杯	— — —	外面ヘラ削り後ミガキ。内面粗いヘラ削り 後ナデ。	密 小石	橙褐色	第2地点

挿図 番号	器種	法量 (cm)	文様調整の特徴	胎土	色調	備考
12-14	土師器 高杯	— — —	外面へら削り。内面粗いへら削り。	密 砂粒・小石	灰褐色	第2地点
12-15	土師器 甕	17.4 — —	内外面口縁横ナデ。外面体部へら削り。内 面体部へら削り後ナデ。	緻密 砂粒	にぶい褐色	第2地点
12-16	土師器 甕	— 9.2	外面体部～底部回転へら削り。内面ミガキ、 黒色処理。	やや粗 砂粒・小石	外 黄白色 内 にぶい黄褐色	第2地点
12-17	土師器 杯	— 5.8	外面体部上位回転ナデ、体部下位へら削り、 底部回転糸切り未調整。内面ナデ。	緻密 白色針状物質	黄白色	第2地点
12-18	土師器 壺	— — —	外面口縁横ナデ、頸部ハケ目後ナデ。内面 ハケ目後ナデ、赤彩。	緻密 砂粒・白色針状 物質	外 にぶい褐色 内 赤褐色	第2地点
12-19	土師器 壺	— — —	外面口縁ハケ目後横ナデ、頸部ハケ目後ナ デ。内面ミガキ	密 砂粒・白色針状 物質	にぶい褐色	第2地点
15-1	土師器 壺	(13.8) 4.4 (7.0)	外面体部上位回転ナデ、体部下位～底部へ ら削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状 物質	外 にぶい褐色 内 黒色	17T
15-2	土師器 杯	(12.8) 3.9 (7.4)	外面体部上位回転ナデ、体部下位へら削り。 底部回転糸切り後一部へら削り。内面ミガ キ、黒色処理。	緻密 砂粒・小石・白 色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	17T
15-3	土師器 杯	(12.8) 3.6 (7.0)	外面回転ナデ。底部回転糸切り未調整。内 面ミガキ、黒色処理。	緻密 白色針状物質	外 黄白色 内 黒色	表面調査
15-4	土師器 杯	— (6.6)	外面回転ナデ。底部回転糸切り後外周一部 へら削り。内面ミガキ、黒色処理。	緻密 砂粒・白色針状 物質	外 にぶい褐色 内 黒色	17T
15-5	土師器 杯	— (6.8)	外面体部～底部へら削り。内面ミガキ、黒 色処理。	緻密 砂粒・白色針状 物質	外 にぶい褐色 内 黒色	17T
15-6	土師質土器 高台杯	— (9.9)	外面回転ナデ。内面杯部ミガキ、黒色処理。 内面台部回転ナデ。	密 砂粒・小石・白 色針状物質	外 黄褐色 内 黒色	19T
15-7	須色器 甕	(24.0) — —	内外面口頸部回転ナデ。外面体部タタキ。 内面体部へら削り後ナデ。	緻密 砂粒・小石	外 黒褐色 内 暗灰色	17T
15-8	土師器 甕	(19.6) — —	外面口縁横ナデ、頸部へら削り。内面ナデ。	やや粗 砂粒・小石	にぶい褐色	表面調査
16-1	土師器 甕	18.0 23.5 7.0	内外面口縁横ナデ。外面頸部へら削り、体 部へら削り後一部ミガキ。底部へら削り。 内面頸部～体部へら削り後ナデ、輪襷み痕。	密 砂粒・小石・白 色針状物質	赤褐色	寄贈資料

表3 出土石器観察表

挿図 番号	分類 用途	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	石質	備考
13-1	打製石鏃	9.6	11.9	2.0	緑泥片岩	2次調査
13-2	打製石斧?	—	7.0	2.0	粘板岩	2次調査
13-3	太形蛤刃石斧	—	5.9	3.3	粘板岩	2次調査

表4 出土土器観察表 (弥生土器)

挿図 番号	文様調整の特徴	胎土	色調	種別	備考
14-1	外面直前段多条L3R。内面口縁L3R、頸部ナデ。	やや粗 小石・白色針状物質	にぶい赤褐色	壺 椀井式?	SI03
14-2	外面直前段多条L3R。内面口縁L3R、頸部ナデ。	密 小石	にぶい褐色	壺 椀井式?	第1地点
14-3	外面平行沈線(5mm)による重三角文。内面調整不乳。	粗 小石	外 灰褐色 内 灰白色	壺 椀井式	第1地点
14-4	外面平行沈線文(3mm)による重弧文。内面ナデ。	粗 小石・白色針状物質	にぶい暗褐色	壺 椀井式	SI02
14-5	外面平行沈線文(3mm)による重三角文。内面ナデ。	密 砂粒	外 にぶい暗褐色 内 灰褐色	壺 椀井式	第2地点
14-6	外面平行沈線文(3mm)による重三角文?直前段反拗 L。内面ナデ。	密 小石・白色針状物質	外 にぶい褐色 内 黒色	壺 椀井式	第1地点
14-7	外面へラ横沈線区画磨消縄文(直前段多条?)内面 ナデ。	やや粗 砂粒・小石	黒灰色	壺 特殊形式?	第1地点
14-8	外面へラ横沈線区画磨消縄文(LR)、無文部ミガキ、 重三角文?内面ナデ。	やや粗 砂粒・小石		壺 特殊形式?	第2地点
14-9	外面結節文区画磨消加第1種LR+R、無文部へラ 削り後ナデ。内面ナデ。	密 小石	外 褐色 内 黒色	壺 椀井式	第2地点
14-10	外面列点文区画直前段多条(L3R)、無文部ミガキ。 内面ミガキ。	密 砂粒	外 黄白色 内 黒色	壺 特殊形式?	第2地点
14-11	外面直前段多条(L3R)。内面ナデ。	粗 砂粒・小石	にぶい暗褐色		第2地点

写 真 图 版



第1 地点調査区全景 (東から)



S I 0 1



SK01



第2地点調査区全景（東から）



S I 0 3



S I 0 3 遺物出土状況①



S I 0 3 遺物出土状況② (図 11 - 1)



S I 0 3 遺物出土状況 (図 11 - 3)



11-1



11-3



11-4



11-5



12-1



12-6



12-7



12-10



12-13



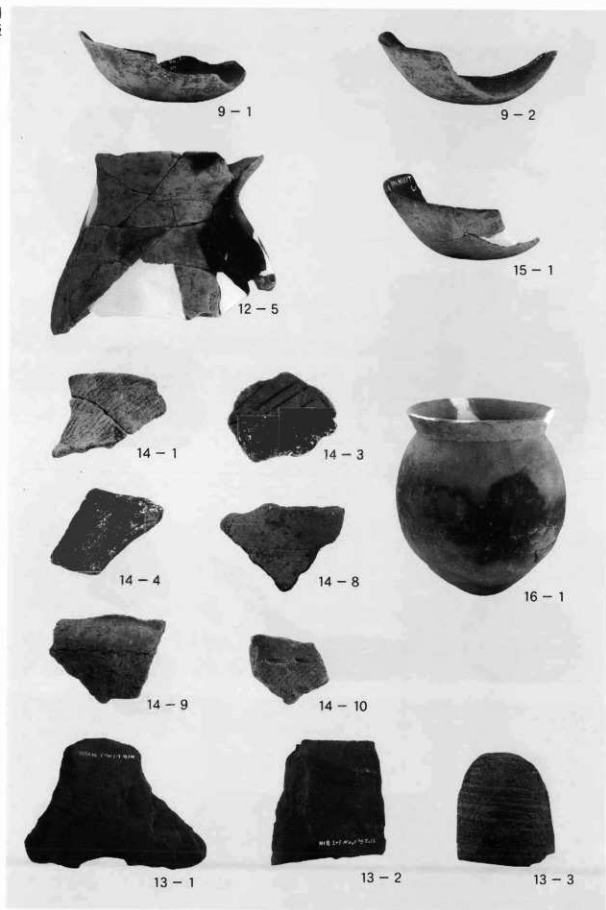
12-11



12-18



12-19



出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	ひがしひろはたBいせき						
書名	東広畑B遺跡						
シリーズ名	小高町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第4集						
編著者名	川田 強						
編集機関	福島県相馬郡小高町教育委員会教育総務課						
所在地	〒979-2111 福島県相馬郡小高町仲町二丁目82番地						
発行年月日	2002. 3. 29						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町 村	遺跡				
ひがしひろはた、いせき 東広畑B遺跡	相馬郡小高町仲町二丁目82番地 小高町小高字東広畑	07563	67	37° 34' 07"	140° 59' 07"	172	道路工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項	
東広畑B遺跡	集落・散布地	弥生・古墳・奈良・平安		住居跡 土坑	弥生土器・土師器・須恵器・鉄滓	古墳時代の前期、平安時代の住居跡	

小高町文化財調査報告書第4集

東広畑B遺跡

2002年3月 発行

発行 福島県相馬郡小高町教育委員会

福島県相馬郡小高町仲町二丁目82

☎ (0244) 44-4114 ㊟

印刷 株式会社 まつざき印刷

福島県双葉郡浪江町高瀬根木内100

☎ (0240) 34-6655 ㊟

